

はじめに

2005年(平成17年)度の当研究所の業績がまとまりましたので、お届け致します。

本年度を振り返りますと、感染症分野では、高病原性鳥インフルエンザ(H5N1)が中国・東南アジアから中央アジア・中近東に広がり、さらに、欧州・アフリカにも拡大しました。主に鶏からの直接感染により、この年度末で190人近い感染者と100人を越える死者が報告され、人のパンデミックに近いことが懸念されています。国内では弱毒型(H5N2)ながら、2005年6月から茨城県で鳥インフルエンザの流行があり、8月から大量の採卵用鶏の殺処分が行われました。このような状況で、国は2005年11月14日に「新型インフルエンザ対策行動計画」を作成し、これを受けて北海道は12月に、札幌市も2006年2月に行動計画を発表しました。当所は新型インフルエンザウイルス検査を担う必要があり、情報収集に努めました。また、札幌市でも結核の集団感染が散見される中、接触者検診の一環として9月から新しい結核感染診断検査(結核菌特異抗原に対する細胞性免疫応答測定:QFT検査)を始めました。

食品分野では、次年度5月29日の「食品等に残留する農薬等に関するポジティブリスト制度(残留基準あるいは一定量を超えて農薬等が残留する食品の販売等の禁止)」施行に向けて、残留農薬一斉分析法の検討に追われました。また、遺伝子組換え食品、食物アレルギー等も関心の高い課題ですが、本年度から食品に含まれるアレルギー物質の検査が開始されました。

マス・スクリーニングの分野では、より多くの先天性代謝異常疾患の発見が可能なタンデム質量分析計を用いたスクリーニングの試験研究が4月から3年間の予定で開始されました。また、生後6カ月と14カ月に行っていた神経芽細胞腫マス・スクリーニングは、本年度から生後18カ月に一本化して事業を継続することとし、厚生労働省研究班の一員として「神経芽細胞腫スクリーニングの有効性を検証するための前向き研究」に参加しています。

環境検査については、全国的に大きな問題となったアスベストによる健康被害に関連して、市有施設で吹き付けアスベストの疑いのある検体について、10月から分散染色用位相差顕微鏡による検査を開始しました。

恒例の「衛研展」は、10月14~16日北海道、札幌市などの普及啓発イベントとして開催された「きたのくにいきいき福祉健康フェア2005」に参加する形で出展しました。市民体験コーナーとして行った色素のペーパークロマトグラフィー検査は好評でした。

JICA関連業務では、10年目を迎えた都市型水質汚濁防止検査技術研修が、アジアから2名、中近東から3名、ヴァヌアツから1名の研修生を迎え、2005年5月30日から7週間行われました。また、16年目を迎えた新生児マス・スクリーニング研修は、今年度から疾患をクレチン症に限り「新生児マス・スクリーニング確立支援(クレチン症)」コースとして、各国の行政官、臨床検査技師、小児科医と一緒に研修に参加する形で新たなスタートを切りました。本年度の研修は、2006年2月6日から4週間行われ、パナマから3名、パラグアイから2名が参加しました。

このような一年を思い出す中、年報33号が完成致しました。どうぞご高覧の上、ご忌憚のない意見を賜れば幸いです。また、当衛生研究所の運営に関し、今後とも、ご指導ご鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

2006年11月

札幌市衛生研究所
藤田晃三